

第二章 中古の物語

物語の歴史は、伝奇物語と歌物語で始まる。空想性の強い『竹取物語』は伝奇物語の最初であり、歌にまつわるエピソードを写実的手法で綴った『伊勢物語』が歌物語の最初である。中古の物語はこの二つの流れを統合する過程で、源

氏物語』を生み出す。『源氏物語』以前に『宇津保物語』『落窪物語』があり、『源氏物語』以後に『浜松中納言物語』『夜の寝覚』『狭衣物語』などが生まれた。『堤中納言物語』はそれらと一線を画した二二―クな短編小説集である。

3

伊勢物語

◆(百七段)

むかし、⁽¹⁾あてなるをとこありけり。そのをとこのもとなりける人を、^(注1)内記に有りける^(注2)藤原の敏行^(注3)という人^(注4)よばひけり。されど若ければ、文も^(注5)いをさをさしからず、ことばもいひ知らず、いはむや歌はよまざりければ、かあるじなる人、案を書きて、かかせてやりけり。^(注6)めでまどひにけり。さて、^(注7)を^(注8)とこのよめる。

つれづれのながめにまさる涙河袖のみひちて逢ふよしもなし

I

返し、^(注9)例のをとこ、女にかはりて、

あさみこそ袖はひつらめ涙河身さへ流ると聞かばたのまむ

II

といへりければ、をとこい^(注10)いたうめでて、いままで巻きて、文箱^(注11)に入れてありとなむいふ。

をとこ、文おこせたり。^(注12)得てのちの事なりけり。「雨の降りぬべきになむ^(注13)見わづらひ侍る。身さいはひあらば、この雨は降らじ」といへりければ、例のをとこ、女にかはりてよみてやらす。かずかずに^(注14)思ひ思はず問ひがたみ^(注15)身を^(注16)しる雨は降りぞまされる

III

とよみてやりければ、^(注17)蓑も笠もとりあへで、しとどに濡れてまどひ来にけり。

^(注1) 内記＝律令制で、中務省に属する役人。文筆に優れた者を任じた。

^(注2) 藤原の敏行＝平安時代の歌人。

^(注3) 得てのち＝男が女のもとに通うようになってから後。

問一 二重傍線(1)・(2)の部分それぞれ現代語訳せよ。ただし、句読点とも(1)・(2)は五字以内、(3)・(4)は十字以内で記すこと。

問二 空欄の部分にはどんな言葉を補ったらよいか。次の中から最も適当なものを選び、番号で記せ。

- (1) なら (2) なり
(3) なる (4) なれ

問三 傍線(a)・(b)の「をとこ」は、それぞれ誰か。次の中から最も適当なものを選び、番号で記せ。

- (1) あてなるをとこ
(2) そのをとこのもとなりける人
(3) 藤原の敏行

問四 傍線(c)を句読点とも二十字以内で解釈せよ。

問五 Iの歌には掛詞になっている部分が一箇所ある。何と何との掛詞か、漢字を用いて記せ。ただし、順序は問わない。

問六 IとIIの歌の応答はおおよそどんなものか。次の中から最も適当なものを選び、番号で記せ。

- (1) 身分の差を考えて苦しい恋をあきらめた、との男の告白に対し、女の側は、寄る辺のない身の上をぜひ救って欲しい、と男に訴えようとした。
- (2) 男が、深い愛にもかかわらず逢えない苦しみを訴えたのに対し、女の側は、男の愛がもっと深いものなら、と条件つきで受け入れようとした。
- (3) 男が、毎日降りつづく雨のために逢えない苦しみを訴えたのに対し、女の側は、男より何倍も苦しいからぜひ逢いに来てくれ、と訴えようとした。
- (4) 恋に苦しみ、涙するぐらいなら逢わない方がよい、との男の提言に対し、女の側は、恋は苦しいからこそすばらしいのだ、と勇気づけようとした。

問七

Ⅲの歌の傍線(d)の部分について。この部分は、「本当に思っているのかどうか、尋ねることができないので」といった意である。(A)「思ひ思はず」と(B)「問ひ」は、それぞれ誰の行為か。次の中から最も適当なものを一つずつ選び、番号で記せ。

- (1) そのをとこのもとなりける人
(2) 藤原の敏行

問八

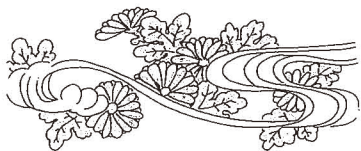
Ⅲの歌の傍線(e)の部分について。ここには詠者のどんな心情が表現されているか。次の中から最も適当なものを選び、番号で記せ。

- (1) 男にたいそう深く愛されているとわかったときの、涙がこぼれるほどのよろこび。
(2) 男にたいして愛されていないとわかったときの、涙がこぼれるほどの深い悲しみ。
(3) 降り出した雨のために男が来ないとわかったときの、天を恨めしく思う気持ち。
(4) 雨にかこつけて来ない男の心変わりがわかったときの、狂おしいほどの怒り。
(5) 身分の差のために愛を貰けないとわかったときの、涙がこぼれるほどの悔しさ。
(6) 女をそれほど愛していないとわかったときの、不誠実を恥じる気持ち。

問九

傍線(f)の部分について。男はなぜ「しとどに濡れて」までやって来たのか。次の中からその理由として最も適当なものを選び、番号で記せ。

- (1) 自分の心変わりをすばり言い当てられたから。
(2) もらった歌の修辞技巧が卓抜であつたから。
(3) 天も歌に感応して突然雨を降らせたから。
(4) 不誠実の報いで、自分の運が尽きたから。
(5) 愛情の浅さを歌によって訴えられたから。



単語チェック

- (形容詞語幹) 十み(あさみ・問ひがたみ) □おこす □わづらふ □ゝあへで
□あてなり □よばふ □をさをさし □めづ □まどふ □つれづれ □ながめ □ひつ(ひづ)